めに蚊の生態的基礎調査として、本市における蚊成虫相の周年消長の調査を実施した。実施方法は 60 W 普通電球を光源とし、New Jersey 型 light trap を地上約 4m の高さに吊り、終夜運転して青酸カリ毒瓶に集めた。設置箇所は市の中央部中原保健所管内に約 1 km の間隔を置いた A. B. C. の 3 カ所で、1958 年 4 月に開始し A は 59 年 3 月迄、B. C は 58 年 9 月迄行い次の 6 属 12 種が捕集された。*Culex pipiens pallens*, *C. tritaeniorhynchus*, *Aedes vexans*, *Anopheles sinensis*, *C. bitaeniorhynchus*, *Armigeres subalbatus*, *Ae. togoi*, *C. orientalis*, *C. infantulus*, *C. vorax*, *Uranotaenia bimaculata*, *Tripteroides bambusa* であつた。

量的には、*pipiens*, *tritaenio.*, *vexans* の 3 種だけで 93.5 % を占め、この 3 種がこの地域での防除対策上の重要種と考えられた。下水性の *pipiens* が 74 % と圧倒的に多い事は、本市の蚊防除対策の重点を下水に置く事の妥当性を確認した訳である。本成績が他の地方の調査成績と異なる点は *tritaenio.* 特に *sinensis* が非常に少ない事であつた。また *vexans* が 7.2 % 捕集されたが従来いわれていたようなこの種の発生源をあまり見かけない事から注目している。主要種は 6 月から 9 月迄の捕集数が多く、雄の出現は 5 月に入ってからである。以上の様な基礎調査の成績の上に立つて今後本市における実際の防除は 6, 7, 8 月の最盛期にアカイエカ対策に重点を置いて進める事にしている。また 5 月の第 1 世代時期に徹底的にたたくという線も考慮している。

(予研¹⁾, 川崎市衛生部²⁾, 伝研³⁾)

✓ 畜舎内微気象と昼間滞留蚊個体数との関係：中尾舜一

Nakao, S: Relation between the resting number of adult mosquitoes and microclimates in the cow stables

演者はここ数年来、数種の蚊の昼間の潜伏習性につき調査を行つて来たが、今回は 4 つの牛舎内の蚊の滞留個体数と舎内微気象との関係についての調査結果を報告する。これは、これ等の蚊の潜伏場所の推定に資するという点で意味をもつものと考ええる。

比較に用いた 4 牛舎は、久留米市長門石にあり互に近接している。この地域は特にシナハマダラカの発生量の多いところである。調査は畜房の壁面の蚊をすべて、吸虫管と捕虫網で採集することによりなされたが、主要種はシナハマダラカ・コガタアカイエカ・アカイエカの 3 種であつた。4 牛舎では、I と II に圧倒的に多かつた。これらは暗くて高温高湿であつた。III は明るく乾燥し

て風通しが良く、IV は暗くて I, II とあまり条件は変らなかつたが、壁面にすき間が多く風通しが良い点で異つていた。また壁面の高さによる個体数の差も明瞭であり、床面より 0~50 cm までの高さに圧倒的に多い。これも明るさ、窓の位置による通風性と関係があるが、それだけではなく、習性として低い場所を好むらしいことが特にシナハマダラカでうかがえる。次に I と II の畜舎で壁面毎の明るさと個体数を比較したところ、暗い場所には個体数が多いことが判つた。ただ、II の 1 の壁面の 6 Lux という極端に暗いところでは *Culex* は非常に多いが、シナハマダラカは逆に少いということが知られた。これはシナハマダラカと *Culex* では好む明るさに差があることを示しているように思われた。以上から考えて、これらの蚊の潜伏場所はその明るさが重要な関係をもっていることが判る。さらに *Culex* は閉鎖的な場所を好むようである。

(久留米大・寄生虫)

✓ 近年わが国におけるハマダラカの減少傾向について：大鶴正満・大森康正 Otsuru, M. & Ohmori, Y.: On the recent decrease of anopheline mosquitoes in Japan

戦後間もない 1947 年以降、本邦各地において行つてきた著者らの採集経験によれば、ハマダラカが年々かなり減少しつつあるように判断される。*Anopheles sinensis* group 4 種の中では、特に *lesteri* および *yatsushiroensis* の急激な減少が目立つており、九州の柳川市、荒尾市、本州の下関市、新潟市などには 1957, '58 年度の成績で両種が姿を消すに至つた地域がある。1949~'53 年の間、東京の上野動物園における北岡、緒方らの蚊の消長調査にも全蚊に平行して *sinensis* の漸減が明かに示された。一般に、わが国における *Anopheles* の減少の傾向は今次の戦争中にも存在し、(1939, '40 年および 1949~'51 年の福井県鯖江地方における資料)、更にさかのばれば今世紀初めにすでに進行しつつあつたと推察される。かかる減少の要因については、明治中葉以来のわが国農村における近代的土地改良事業の推進、すなわち湿田の乾田化、排水工事、河川の改修、沼沢の埋立などに先ず求めることが出来るようである。これらのことは主要蚊である *sinensis* group の主な発生の足場である水田に人工的改変を加え、次第に発生しにくい環境にしていつたと思われる。また各地における水田の石灰撒布、農薬の使用(特に戦後は、DDT, BHC, 有機燐製剤など)は蚊幼虫の殺滅に役立つことになつた。

わが国の土着マラリアは、今世紀に入ってから減少を